

## 研究主題「発音と綴りの規則性に気付かせ、

### コミュニケーションを支える基本的な技能を養う指導の工夫」

東京都教職員研修センター研修部授業力向上課  
台東区立柏葉中学校 主任教諭 石川 彰子

#### 第1 研究のねらい

国際化する社会において外国語によるコミュニケーション能力は不可欠な力となっている。特に中学校では、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能を総合的に育成し、実際のコミュニケーションの場面において英語を運用する能力の基礎を養うことが重要である。

また、中央教育審議会答申(平成20年1月)では、中学校外国語科における学習指導要領改善の基本方針として、「『読むこと』『書くこと』の指導の充実を図ることにより、『聞くこと』、『話すこと』、『読むこと』及び『書くこと』の四つの領域をバランスよく指導し、高等学校やその後の生涯にわたる外国語学習の基礎を培う。」と記している。さらに、学習指導要領改善の具体的事項として、「自発的・持続的な学習を推進するため、辞書の使い方、音声と文字との関係などに関する指導の充実を図る。」とも記している。

小学校外国語活動において生徒たちは音声を中心に英語に慣れ親しんでいる。その素地を生かし、中学校外国語科ではコミュニケーション能力の基礎を養うことを最重要事項としている。文字を通じた学習の開始に当たり丁寧な導入を行うことで、正しく「読む」「書く」ことができるという自信をもち、英語学習に自ら進んで取り組める生徒を育てたい。そこで本研究では「発音と綴りとを関連付けて指導すること」に着目した指導方法を開発することをねらいとした。

#### 第2 研究の内容と方法

##### 1 研究仮説

単語を発音と綴りのルールに基づいて整理し、系統立てて指導すれば、「読むこと」「書くこと」の基本的な技能が身に付き、英語学習に自ら進んで取り組める生徒が育つであろう。

##### 2 基礎研究

###### (1) 「発音と綴りの規則性」と「コミュニケーションを支える基本的な技能」の関連

日本語の平仮名の読み方は、一文字に対しほぼ一音であり、音と文字の対応関係が分かりやすいが、英語のアルファベットの読み方は、一文字に対し複数の音があり、音と文字の対応関係が分かりにくい。このような言語的距離が日本語を母語とする者にとって英語の表記における規則性を発見しづらくしている。また、コミュニケーションを支える基本的な技能として、「聞く」「話す」「読む」「書く」の四つの領域のうち「読むこと」「書くこと」の中では、文字や符合を正しく「読む」「書く」ことに習熟する必要がある。

そこで本研究では、英語の発音と綴りの規則性に気付かせる指導の工夫に着目した。正しい発音と綴りの関係を意識させ、発音、綴り、意味を関連付けて語彙を習得させることにより、聞いたり読んだりしたことについてメモをとるなど4技能を統合的に用いる能力を養うことができ、実際のコミュニケーションの場面において英語を運用する能力の基礎を身に付けさせることにつながる。

###### (2) 第二言語習得論を活かした「発音と綴りのルール」の指導方法

第二言語習得論に基づいた語彙習得のアプローチを用いた指導の先行研究から、アウトプッ

「発音と綴りの規則性に気付かせ、  
コミュニケーションを支える基本的な技能を養う指導の工夫」

トの活動を活発にするためには、発音、綴り、意味が一体となってインプットされるような指導が不可欠であることが分かった。また、語彙を習得するには語を6～16回繰り返して使用する必要があることも分かった。これらのことから、記憶のメカニズムに沿う授業を展開し、インプットとアウトプットの質と量、授業内での反復練習の回数等に配慮する必要がある。また、発音と綴りのルールは研究者によって多様に分類されていて20以上のルールがあるが、内容を初学者に必要なルールに絞り、段階的に指導を行い、学習事項の定着を図ることが必要である。

### 3 調査研究

単元ごとの学習内容の習得状況や学習に関する意識の実態を把握するため、7月に都内公立中学校第1学年の生徒約100名を対象に、「英語を読む技能及び書く技能に関する調査」並びに「英語の学習に関する意識調査」を行った。

「英語を読む技能に関する調査」は得点率81%～100%の生徒（以下「A層」という。）が67名、51%～80%の生徒（以下「B層」という。）が25名、50%以下の生徒（以下「C層」という。）が11名であった。「英語を書く技能に関する調査」はA層の生徒が13名、B層の生徒が29名、C層の生徒が61名であった。2つの調査を比較すると、「読む技能」についてはおおむね良好だが、「書く技能」についてはC層の生徒が多く見られ、課題があることが分かった。

表1 第1学年生徒全体の分析

正しい発音と綴りの関係への意識	既習単語の発音を聞いて綴りが	
	書ける	書けない
意識している	35%	24%
意識していない	10%	31%

「英語の学習に関する意識調査」において「正しい発音と綴りの関係を意識しているが、既習単語の発音を聞いて、綴りが書けない」と回答した生徒が約24%、「正しい発音と綴りの関係を意識していない。既習単語の発音を聞いて、綴りが書けない」と回答した生徒が約31%であった(表1)。発音から文字へと結び付かず、語を正しく綴ることに自信がもてないことが第1学年の生徒全体としての課題と捉えた。

表2 「書く技能」得点層ごとの分析

書く技能	正しい発音と綴りの関係への意識	
	意識している	意識していない
全体(103名)	59%(61名)	41%(42名)
A層(13名)	100%(13名)	0%(0名)
B層(29名)	59%(17名)	41%(12名)
C層(61名)	51%(31名)	49%(30名)

次に、「英語の学習に関する意識調査」の結果と「書く技能」の調査結果とを比較し、得点層ごとの傾向を調べた(表2)。A層では正しい発音と綴りの関係を意識している生徒の割合が100%、B層では59%、C層では51%であった。高得点層ほど正しい発音と綴りの関係を意識している生徒の割合が高いことから、書く技能の向上には「正しい発音と綴りの関係を意識させる指導」が重要であるとあると考えた。

### 4 開発研究

基礎研究、調査研究を踏まえ、発音と綴りの規則性に気付かせる指導のモデルと中学校で学ぶ語を発音と綴りのルールごとに分類した単語一覧表を作成し、指導のモデルを1単元、1単位時間に位置付けた指導案に沿って検証授業を行った。

#### (1) 発音と綴りの規則性に気付かせる指導のモデル

単語の発音と綴りを系統立てて指導できるよう、「発音と綴りとを関連付けて指導すること」に着目した指導のモデルと教材を開発した。開発に当たり、既習単語を発音と綴りのルールごとに整理して復習する活動を行えるように考慮した。この際、気付き、定着、活用というステップを踏むこと、発音、綴り、意味が一体となってインプットされること、の2点を重視した。

第一に、音を表す文字のまとまりを意識させるために、共通の音と綴りをもつ既習単語と新出単語を同時に提示し、発音させる。以下のように、気付き、定着、活用の段階を踏む。

① 気付きの段階

段階的に文字を示し、教師の発音を聞かせ、音の特徴を捉えさせて正しく発音させる。

② 定着の段階

「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を関連付けて使用する活動を行う。同じルールを含む語の綴りを見ながら発音する練習を毎回一斉に行った後、ペアでも行い、生徒同士が刺激し合って学び合う場面を設定する。書く練習として、以下の活動を設定する。

- ・ 第1時…発見した共通点を意識して発音させながら語の綴りを書かせる。
- ・ 第2時…教師の発音と最初の1文字をヒントに語の綴りを書き、語を表すイラストに結び付ける選択問題と教師の発音から語を導き、文中の空欄に語を綴る空所補充問題に取り組みさせるなど、練習にバリエーションをもたせる。
- ・ 第3時…小テストを行い、しっかり定着していることを確認させる。

③ 活用の段階

練習した語を文の中で使わせる。学習したルールを応用して、未習語についても綴りから発音と意味を推測する活動を取り入れ、探求する学習へと広がりをもたせる。

第二に、言語活動を活発にするためには、発音、綴り、意味が一体となって十分にインプットされる必要がある。イラストなどの視覚的補助を使用し、語の意味を訳語を使わず英語のまま理解できるようにした。語の視覚情報や音声情報を与え、綴りを見ながらリズムに乗ってテンポよく発音する、ペアで互いの発音を聞く等、発音と綴りに集中して繰り返し練習できるようにし、発音、綴り、意味を結び付けたインプットを十分に行った。語の発音、綴り、意味といった情報を記憶から取り出しやすくするため、既習単語の発音を聞き、正しく綴る練習を行い、インプットした語をアウトプットの活動で使用できるようにした。

**(2) 中学校で学ぶ語を発音と綴りのルールごとに分類した単語一覧表**

中学校学習指導要領（平成20年3月告示）において、中学校で学ぶべき語数は「1200語程度」とされ、従来と比べ300語程度増加する。このうち使用頻度が高い語を抽出し、発音と綴りのルールに基づいて整理した。この一覧表を用いて、各単元で学習する語がどのルールに属するか確認し、単元の指導計画に位置付けることで、文字指導初期の段階から3年間を見通して発音と綴りのルールを指導することができる。

**(3) 指導のモデルを位置付けた1単元、1単位時間の学習指導案**

中学校における英語の授業では毎時間、新出単語を学ぶことになる。生徒は辞書で調べるなど、語の意味についてはある程度、予習や復習が可能であるが、発音記号には習熟していない。アルファベットの導入期に発音記号を用いて指導することは学習の負荷を大きくする。授業内で発音と綴りを関連付けて指導し、綴りを見て発音できる、発音を聞いて綴れるように指導することで、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4技能を統合的に用いて語彙を習得させる。

発音と綴りの規則性に気付かせる指導を1単元、1単位時間の学習指導案に位置付けるとともに、本単元、本時の内容に結び付けて、コミュニケーションを支える基本的な技能を身に付けさせるよう、以下のように指導する。

「発音と綴りの規則性に気付かせ、  
コミュニケーションを支える基本的な技能を養う指導の工夫」

ア 音声を重視し、新出単語の発音指導において音を表す文字のまとまりを意識させる。

イ 新出単語や本文を「聞く」「読む」活動で音声のインプットを十分に行い、発音と綴りを一致させるよう指導する。

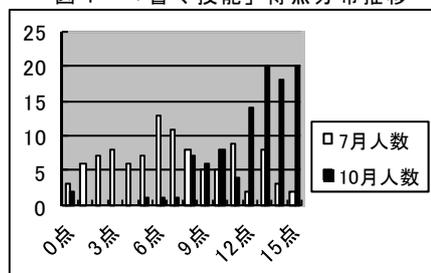
ウ アウトプットの機会を確保し、「話す」「書く」活動で学んだ知識を活用させる。

## 5 検証授業

都内公立中学校第1学年の生徒を対象とした検証授業を行い、その効果を検証した。1年生前期に検証対象の生徒が使用している教科書本文に多く登場する発音と綴りのルールを調べ、単語の一覧表にまとめた。本単元の内容から、今回の授業で扱うルールを二重母音字「oo」と「i+子音字+e」の2つに絞り、単元を通して毎時間少しずつ指導した。発音と綴りの規則性に気付かせ、繰り返して練習させることで、単語を構成している文字を音を表すまとまりとして意識させることができた。また、発音と綴りを結び付ける活動を授業の始めに行うことで、その後の展開での学習活動が活性化し、本単元の目標を達成することができた。

10月に行った検証授業後の意識調査及び技能調査で、発音と綴りの規則性に気付かせる指導

図1 「書く技能」得点分布推移



を取り入れた英語の授業の効果測定した。7月の調査結果と比較すると、「読む技能」における得点層ごとの人数には有意な変化が見られなかった。「書く技能」においては、図1のように全体的に大きな向上が見られた。A層の生徒が13名から58名に、B層の生徒が29名から39名に増加し、C層の生徒が61名から5名に減少している。

意識調査においては、「正しい発音と綴りの関係を意識している」と回答した生徒の割合が59%から63%に増加した。また、「新出単語を見たとき、その単語の発音を予想できる」と回答した生徒の割合が62%から72%に増加した。一方で、「既習単語の発音を聞いて、綴りが書ける」と回答した生徒の割合は変化しなかった。

正しい発音と綴りの関係への意識は高まりつつあり、既習単語や新しい単元で学んだ単語を正しく書く技能が向上した。また、発音と綴りの規則性に気付かせる指導のモデルは、新出単語に出会ったときに自分の力で予想して発音しようとする姿勢を育てる手だてとして有効であった。綴りを見て発音することから、発音を聞いて綴ることへの自信につなげるには、継続的な指導で成功体験を重ねる必要がある。

## 第3 研究の成果

中学校で学ぶ単語を発音と綴りのルールに基づいて整理し、系統立てて指導することで、発音と綴りの規則性に気付かせることができた。生徒は音を表す文字のまとまりを一層意識するようになり、既習単語や新しい単元で学んだ単語を正しく書く技能が向上した。授業に集中し、インプットやアウトプットの活動に自ら進んで取り組む姿勢が見られた。

## 第4 今後の課題

国際化する社会を生きるに当たって、実際のコミュニケーションの場面において未知の事項を調べながら英語を運用する能力の基礎を養うために、以下の2点が課題である。

- ・ 読む技能について習得状況の詳細な分析を行い、十分なインプット量を確保すること。
- ・ 継続的な指導を通じて生徒に正しく「読む」「書く」ことへの自信をもたせること。